

令和 5 年度 栄東中学校入学試験問題

東大特待 I (1月12日)〔国 語〕 (50 分)

受 験 番 号	
氏 名	

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 監督^{かんとく}の先生の指示があったら、**問題用紙**と**解答用紙**のどちらにも**受験番号**と**氏名**を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で26ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて**解答用紙**に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問事項があったら、だまって手をあげて監督の先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、**問題用紙**と**解答用紙**は別々にして、監督の先生の指示にしたがって提出してください。

一

次の（１）～（８）に当てはまる最も適切な言葉をあとの語群から選び、それぞれ漢字に直して答えなさい。ただし、語群の言葉は一度ずつしか使いません。

- ・ 各国の代表が（１）に会する。
- ・ （２）な知識で対応するのは失礼だ。
- ・ （３）物を交番に届ける。
- ・ （４）用にのしを付けてもらう。
- ・ 悲しい知らせを聞き（５）にたえない。
- ・ マラソン大会で（６）を制して先頭に立つ。
- ・ 小学生には（７）な腕時計うでをしている。
- ・ （８）と続く歴史。

【語群】

シンモツ	レンメン	ショウシン	イチドウ
フソウオウ	シュウトク	ナマハンカ	キセン

二

次の（１）～（１０）に当てはまる最も適切な言葉をあとの語群から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度ずつしか使いません。

- ・ 事件の真相を（１）にする。
- ・ 夕立が（２）降ってやんだ。
- ・ 彼の頼みたのなら協力するのに（３）ではない。
- ・ 泣きつかれて（４）のようになる。
- ・ けんかの（５）を食う。
- ・ 観客席は興奮の（６）となった。
- ・ 妹を泣かせただなんてとんだ（７）だ。
- ・ 兄は（８）なので家でしかいられない。
- ・ 五点も差がつき（９）が悪い。
- ・ （１０）なく車が通る。

【語群】

ア	ぬれぎぬ	イ	そばづえ	ウ	るつば	エ	ひとしきり	オ	旗色
カ	つまびらか	キ	内弁慶 うちべんけい	ク	間断	ケ	やぶさか	コ	ぬけがら

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号もすべて字数にふくみます。

有機栽培は科学的に合成された肥料と農薬を使用しないという基本的立場をとり、その点では慣行栽培^{*1}に対立する栽培法である。一方、「有機」という言葉は、生態系、循環、持続可能性、生物多様性、共生などの多様なキーワードを含む非常に幅広い概念であり、化学肥料と合成農薬の不使用という立場だけでは、「有機」の全体像をカバーできない。

農林水産省の有機農業の定義は、「農業の自然循環機能の維持増進を図るため、化学的に合成された肥料及び農薬の使用を避けることを基本として、土壌の性質に由来する農地の生産力を発揮させるとともに、農業生産に由来する環境への負荷をできる限り低減した栽培管理方法を採用したほ場において生産」する農業とあり、

I 以上の意味が含まれてる。国際有機農業運動連盟（IFOAM）による有機農業の定義には、「土壌・自然生態系・人々の健康を持続させる農業生産システムである。……（中略）……伝統と革新と科学を結びつけ、自然循環と共生してその恵みを分かち合い、そして、関係するすべての生物と人間の間に公正な関係を築くとともに生命と生活の質を高める」とあり、「有機」の理念はさらに広がる。

「有機」の理念すべてを、現実の栽培の中で実現することは簡単ではない。さらに、「有機」の理念が幅広い¹ため、その理念を実現する栽培法は個人の考え方に依存する部分が大きくなり、栽培法が多様になる。栽培法の多様化は、有機農産物市場での混乱を招く。理念のすべてを追求する先進的な有機栽培農家から、農薬の使用量を減じただけの減農薬栽培農家、中には、農産物の付加価値を上げるための名前だけの有機栽培農家も現れる。A 貨が B 貨を駆逐するように、不適切な方法で作られた有機農産物の市場への流入は「有機」農産物の価値を失わせ、消費者の信頼を失うのは必然である。有機農産物の価値を守るための認証制度は、有機栽培を普及、定着させるための必然的プロセスであった。有機認証には、「有機栽培」とそれ以外の栽培を区別する明確で具体的な境界が必要とされる。有機認証に際して世界的に使われた基準は、「使用できる資材」である。欧米の基準に倣い、日本の農林水産省も「使用できる資材」を有機農産物の基準に採用した。

「使用できる資材」が明確になったことで、有機農産物の信用が確保され、市場での信頼を通じて消費者に受け入れられる基礎ができた。しかし、「使用できる資材」を認証基準に用いたことで、「有機」という言葉が持っていた多くの理念が有機JAS栽培では

付属的な位置づけとなり、本来の「有機」と乖離するケースもでてくる。本書では、「使用できる資材」を基準に認証された有機栽培を、「有機JAS栽培」と表現している。

有機栽培で使用が認められている資材に、ボルドー液がある。ボルドー液は、硫酸銅と消石灰を混合した、病原菌を殺傷する能力が高い殺菌剤である。現在でも、リンゴの有機栽培には、病気の防除のためにボルドー液が欠かせない。しかし、硫酸銅は劇物指定を受けている生物毒性が強い物質で、人体にも有害で、土壌に蓄積すると環境にも悪影響を与える。一見、「有機」の理念と反するが、硫酸銅は合成物ではなく、自然の鉱物に由来する天然物であるという理由から、有機JASで使用が認められている。しかし、ボルドー液でも合成殺菌剤でも、農地に散布したときの生物群集に与える影響は同じである。

「有機」の一つの理念に、生物多様性がある。農地には、作物に害を与える病原菌や害虫、それらを抑える天敵、そして作物生産には害も益も与えない中立な生物が多数棲んでいる。合成農薬に限らず、ボルドー液の農地での散布は、有害か有益かにかかわらず、すべての生物を殺傷する。種類を問わず、生物に作用する農薬の非選択的殺傷性は、必然的に農地の生物多様性を損なう。

天敵の存在は無農薬で害虫を防除するためには不可欠であるが、非選択的殺傷性を持つ農薬の散布は天敵も同時に殺傷し、病害虫を抑える農地生態系の力を弱体化させる。有機JASで認められている殺虫性の生物農薬にBT⁴剤がある。細菌のバチルス菌が作る殺虫性タンパク質を製品化したものである。しかし、生物由来の農薬でも、天敵昆虫も殺す。

農薬に関しては、化学合成由来かどうか以外に、特定の有害生物にのみ作用する選択性は、「有機」の理念の一つである生物多様性を実現する重要な要素である。

有機栽培では、化学肥料の代わりに有機肥料を用いる。慣行栽培が確立する以前の農業は、窒素不足による低生産が大きな問題となっていた。ヨーロッパで発達した有機農業は、窒素不足を補うために畜産と連携することで、家畜糞尿由来の堆肥を有機肥料として利用してきた。現在でも、農畜複合は、有機栽培の理念の一つである「II」を達成するための重要な方法となっている。

現在の日本の畜産業は、鶏や豚などの大規模飼育や、和牛の舎飼いが中心となっている。したがって、家畜の飼養は、放牧や牧草などの粗飼料給与が基本ではなく、トウモロコシなどの輸入濃厚飼料の給与が中心となる。また、北海道などでも、かつての放牧中心から濃厚飼料の比重を高めた乳牛の多頭飼育が広まっている。濃厚飼料中心の多頭飼育は、窒素を多く含んだ糞尿が大量に出てく

るので、その処理が大きな問題となる。

畜産系の有機肥料は、もとをたどると、化学肥料を利用した慣行栽培牧草や輸入トウモロコシに由来する飼料で育てられた家畜糞尿から作られている。つまり、有機肥料の投入という形であっても、有機栽培は、化学肥料由来の窒素を土壌に投入している状態に支えられている。そのため、過去の有機栽培に比べ、現在の有機栽培では、慣行栽培に匹敵する高収量を達成できるようになった。一見、旧来の有機栽培がかかえていた低い生産性の問題が解決されたかに見えるが、有機質肥料の投入は別の問題を生じさせた。

現在の家畜の飼養形態と組み合わせられた有機栽培は、糞尿処理のための循環が前面に出やすく、土壌に糞尿由来の窒素が過剰に供給されやすくなる。農畜複合による循環型農業は、有機栽培の一つの方向であるが、窒素の過剰投入は、良質の完熟堆肥投入を通じて地力の向上を目指す有機栽培の本来の姿に反する。

有機質由来の窒素が化学肥料由来の窒素よりも安全ということではなく、作物にとってはどちらも同じである。問題は、由来よりむしろ投入する量にある。有機認証においては、利用した資材の種類だけが評価され、資材の投入量には制限が課されていない。農地に負荷がかかるほど大量の糞尿由来の有機肥料を投入しても、有機認証では問題にされないのだ。家畜由来の未熟な厩肥の大量投入は、農地を窒素過多の状態にし、環境や健康に悪影響を引き起こす。

有機物に含まれる窒素は、微生物の活動を通じてアンモニウムなどの無機窒素に分解され、作物に吸収される。温度の低い春先などは微生物の活動が低く、有機物の分解が遅れ、肥料としての効果が出にくいので、適切な量を超えて与えられがちになる。そうすると温度が高くなる夏には逆に分解が進み過ぎ、畑が窒素過多になる。このような畑で育った有機栽培野菜は、窒素を過剰に吸収して、慣行栽培野菜より硝酸態窒素含有量が高くなり、かえって食品の安全性に問題を生じる場合も出てくる。

有機肥料を適切に投与することは、供給量を簡単に計算できる化学肥料の投与より難しく、過剰投与になりやすい。もちろん、植物由来の堆肥や家畜糞尿由来の完熟堆肥を投入し、着実に土作りを行なっている有機栽培農家も多く、このような農家からは硝酸態窒素の低い野菜が供給される。しかし、問題は、市場に窒素過多条件で育てられた野菜が混じること、有機野菜に対する消費者の信頼低下につながることである。現在の日本の有機栽培の一つの問題は、地力の向上を目指す有機栽培と、窒素過多の状態になった有機栽培が混在していることにある。

有機認証は、有機農産物を市場で拡大するために一定の効果をあげてきた。序章で述べたように、欧州や北米などでは消費者の食品安全や環境汚染に対する関心の高まりから、有機農産物の消費が毎年増加傾向にあり、市場で大きな一画を占めるまで成長している。日本では、2006（平成18）年に有機農業推進法が制定され、有機農業を拡大しようとする社会的機運はあるが、有機JASを取得した耕地面積は全体の0・2％程度にとどまり、2006年からほとんど増加が見られない。

有機肥料の多投入は、化学肥料の投入による病害虫の発生増加という慣行栽培と同じ問題を引き起こす。肥料を与えることと農薬を使うことは、切り離せない関係にある。有機物由来の窒素でも、吸収量が多くなると、作物体の窒素成分が高くなり、病気や害虫を引きつけやすくなる。作物の窒素吸収量が多くなると、合成農薬を使えない有機栽培では、病害虫防除の作業が過大となり、経済的被害も拡大しやすくなる。雨が少ない乾燥気候では病害虫の発生も少なく、有機栽培も広がりやすいが、日本のような高温・多湿の気候条件は、病気や害虫、雑草が発生しやすく、有機栽培の難易度は上がる。日本で有機栽培が広がらないのは、合成農薬を使用せずに病害虫を防除する技術的困難さという、栽培上の問題も大きいと思われる。

（杉山修一『ここまでわかった自然栽培―農薬と肥料を使わなくても育つくみ』より）

*1 慣行栽培……………ここでは有機栽培ではない作物の栽培。

*2 化学肥料……………化学的処理によって工業的に生産される肥料。

*3 合成農薬……………農薬のうち有効成分が化学合成されたもの。

*4 ほ場……………耕作する農地。

*5 有機JAS栽培……………有機JASマークの表示を許可されるような栽培。有機JASマークは、輸入、国産を問わず一定の基準を満たす有機農産物、畜産物、加工食品以外は「有機」と表示できない規則。農産物の場合、種まきの二年以上前から禁止農薬や化学肥料を使わずに栽培し、登録認定機関が検査し認定した事業者のみが表示できる。

*6 乖離……………そむき離れること。はなればなれになること。

*7 粗飼料……………濃厚飼料に対する言葉で、牧草や乾牧草、わらなどの飼料。家畜に満腹感を与え、便通をよくする効果が

ある。

- * 8 濃厚飼料……………粗飼料に対する言葉で、近代的な畜産に用いられる、特にタンパク質が多い飼料。
- * 9 完熟堆肥……………堆肥の中でも分解、発酵が充分に行われたもの。
- * 10 厩肥……………家畜などの糞尿とわらなどを混ぜて腐らせた肥料。

問一 本文中の **I** に当てはめるのに最も適切な言葉を、本文中の **I** より前から十字以上十五字以内でぬき出して答えなさい。

問二 — 線部1「『有機』」の理念が幅広いため、その理念を実現する栽培法は個人の考え方に依存する部分が大きくなり、栽培法が多様になる」とありますが、これはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア「有機」の意味が広いので、こういうものが有機栽培された農作物かを消費者が理解しにくくなってしまい、農家がいくら有機栽培をしてもその判断は消費者に任されているということ。
- イ 有機栽培の作物と聞くだけで質のよいものであるという印象を受けてしまい、多くの人々が「有機」という言葉に依存してしまうので、そうならない栽培法が多く生み出されるということ。
- ウ「有機」の幅広い考え方に対応するために、農家ごとに有機栽培とはどういうものかを研究し、よりよい作物を生産しようと多くの有機栽培の方法が実験的にあみ出されているということ。
- エ「有機」の考え方が一つではないため、農家が有機栽培をする際に作物の栽培の仕方はそれぞれの農家ごとに違う方法で行われ、結果として有機栽培のやり方が多く生じること。
- オ「有機」の理念が広いので、実際の有機栽培の方法は農家次第になり、その結果無数の栽培方法が存在することになって結局農家は消費者受けするやり方に依存するしかないということ。

問三 本文中の **A**、**B** に当てはめるのに最も適切な言葉を、それぞれ漢字一字で答えなさい。

問四 — 線部2「『使用できる資材』を認証基準に用いたことで、『有機』という言葉が持っていた多くの理念が有機JAS栽培では付属的な位置づけとなり、本来の『有機』と乖離するケースもでてくる」とありますが、これはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア「有機」には多様な意味があるので農林水産省が「使用できる資材」を決めて有機JAS栽培の認証という制度を設けても、本来、多種多様なはずの有機栽培をしつかりと行っているとは言えず、そういった制度自体が意味を持たなくなる場合もあるということ。
- イ「使用できる資材」を守って栽培すれば有機JAS栽培の農作物であると認められるため、それが主となり、それ以外の点で「有機」の理念を満たす栽培を実行することがおろそかになってしまい、本来の有機栽培というものから遠くなる場合もあるということ。
- ウ 有機栽培の証明とも言える有機JAS栽培の認証を得るには「使用できる資材」を守った栽培に加え、それに付属した細かい基準も満たす必要があるため、栽培する側にとっては大きな負担になり、有機栽培から離れていく農家が多くなる可能性があるということ。
- エ「使用できる資材」を守って栽培すれば有機JAS栽培であると認められ、有機栽培であることの証明になるはずであるのに、「有機」の意味は広いという考えがあるため、いくら「使用できる資材」を守っても、世間からは有機栽培と認められない場合もあるということ。
- オ 多様な意味を持つ「有機」の理念の中で「使用できる資材」は一部の付属的な部分に過ぎないのに、有機JAS栽培ではそれを基準にしたため、農家は簡単に有機栽培を名乗ることができるようになり、消費者が有機作物から離れていく可能性もあるということ。

問五 ―線部3「ボルドー液」、4「BT剤」とありますが、本来の有機栽培においては、これらの使用にはどのような問題がありますか。「という問題。」に続くように二十五字以内で答えなさい。

問六 本文中の **Ⅱ** に当てはめるのに最も適切な言葉を、本文中から一語でぬき出して答えなさい。

問七 ―線部5「肥料を与えることと農薬を使うことは、切り離せない関係にある」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 肥料を使うことによって土壌から作物へ多量の窒素が吸収されると、病気や害虫を引きつけやすくなってしまっているので農薬が必要になるから。

イ 有機栽培に限ったことではなく、作物の栽培には肥料が必要になるし、農薬の散布もしなければならぬのが農業の普通の姿であるから。

ウ 有機認証を取得するために必要とされる資材の中に、使わなくてはならない肥料の種類や量と同時に、使わなくてはならない農薬も指定されているから。

エ 化学肥料を使うと土壌には質の低い窒素が多くなってしまい、作物は病気や害虫に弱くなるので農薬を使わずに栽培することはできないから。

オ 有機栽培では合成農薬を使えないので、病気や害虫に強い作物を育てるために、作物が土壌から十分な窒素を吸収できるような肥料が必要となるから。

問八 あなたが農業を営む場合、有機栽培と慣行栽培のどちらを行いますか。本文をふまえ、理由とともに答えなさい。有機栽培と慣行栽培のどちらを選んでも試験の点数に差はつきません。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号もすべて字数にふくみます。

関東では昨日、梅雨が明けたばかりで、今日は朝から雲ひとつない快晴だった。陽射しは強いものの、うだるような暑さではない。それでも駅前^{えきまへ}に辿り着いたときには、じっとり汗をかいていた。肩で息をしながら、スマホを取りだしてかまえたが、ちょうどバスが目の前を通り過ぎていくところだった。しばらく待って、ようやく川原崎花店が見えた。

真つ黄色だった。

これでもかというくらい、店頭^{じよう}にヒマワリを並べているからだ。大小さまざまな多種多様なヒマワリを、李多^{りた}が世田谷にある花卉市^{*1}で仕入れてきたのである。ちょうどいい具合に、陽の光を浴びて、店自体^{かがや}が輝いているようだ。駅をでてきたひとの目を引くこと請け合いだ。それを狙^{ねら}って李多と光代^{みつよ}さんと陳列^{ちんれつ}したのだろう。

川原崎花店は三階建てのビルの一階で路面店だが、間口^{まぐち}がとても狭い。しかも大型スーパーとパチンコ店のあいだというより隙間^{すきま}にあるようなものだった。だからこそ少しでも目立つよう工夫をしなければならぬ。幸いにして花屋には花がいくらでもある。これを使わない手はないというわけだ。

撮^とった写真を川原崎花店スタッフのグループLINE^{*2}に送ってから、ロータリーに沿って店に戻る。その途中、Tシャツに七分丈^{しちふたけ}のパンツといういでたちの少年が視界^{しかい}に入った。そばにバス停もなければ、タクシー乗り場もない場所で突っ立っている。その横を通り過ぎるとき、相手に気づかれぬよう横目でその顔を確認した。

やつぱりそうだ、昨日、店にきた子だ。

中学生と思しき少年ひとりの来店自体珍しく、そのうえいまどき珍しい坊主頭^{ぼうず}なので覚えていたのだ。それだけではない。光代さんがなにを勧めても、気のない返事をするだけなのに、店の端から端まであらゆる花をじっくり見ていた。結局は十五分近く店内をうろついた末、なにも買わずに去ってしまった。

「気づいた?」

店に戻った紀久子の手を握り、売場の奥まで引つ張っていくと、光代さんはそう訊ねてきた。

「坊主頭の子ですよ」

「そう。でね。いまさつき李多さんに聞いたら、一昨日もきてたんですって」

「そうだったんですか」

紀久子は李多のほうに目をむける。彼女は作業台で花束をつくりはじめていたのだ。ガーベラとバラをメインに、赤い実をつけたヒペリカムと小さな白い花を咲かせたフロックスを組み合わせて二千円の束売りである。準備した花の量からして、二十束前後はできそうだった。

「花が好きなんですかね」

「それはないよ」紀久子の言葉を、李多はあつさり否定する。¹「熱心に花を見ていた。でも花のむこうにだれかがいたわ。あの子はそういう目だったもの」

花のむこうにだれかがいた？

わけがわからない。どういう意味か、紀久子が訊ねようとしたときだ。

「さますよ、あの子」光代さんが言った。声をひそめながらも、目が活き活きと輝いている。どうやら面白がついているらしい。²「どうします？」

「一昨日は私で、昨日は光代さんだったんだから、今日はキクちゃんだね」

「それはそうだ」光代さんが同意する。「がんばって」

「私になにをしろと」

「あの子に花を売ったら、その同額の特別手当をだしてあげてもいいわ」

花束をつくる手を休めずに李多が言った。

「きたわよ」

光代さんが小声で囁く。少年は店の前に立ち、溢れんばかりのヒマワリをじっと見つめている。中学生と思しき少年が買う花の額

なんて（ ）知れている。

でもイッチョ、やつたるか。

いきなり声をかけるのはどうかと思い、少し距離を取って、少年の様子を窺う。

紀久子より背が低く細身だが、華奢ではなかった。それどころか腕や脚、両肩にもしっかりと筋肉が付いている。そのときになつて黒地のTシャツの背中に白抜きで、『TOBE BOXING GYM』と英語が綴られていることに紀久子は気づいた。戸部ボクシングジムにちがいない。鯨沼商店街の真ん中あたりのネイルサロンと、おなじビルの三階にあった。じつを言えば上京して六年三ヶ月、そんなところにボクシングジムがあるとは、まったく知らなかった。このひと月半、花の配達で何度か前を通っているうちに気づいたのだ。

少年がいま視線をむけているヒマワリは、〈ゴッホのひまわり〉だ。ゴッホとはもちろん、画家のフィンセント・ファン・ゴッホである。ただし〈ゴッホのひまわり〉を見て、ゴッホがヒマワリを描いたのかと言えばそうではない。逆なのだ。ゴッホの描いたヒマワリに似せて、種苗メーカーが新たに品種改良したヒマワリだという。おなじメーカーでは〈モネのひまわり〉、〈ゴーギャンのひまわり〉、〈マティスのひまわり〉といった画家の描いたヒマワリをモチーフにした品種をつくっているのだと光代さんに教わった。それぞれのひまわりのカードには、名前と値段、そして彼らの描いたヒマワリの絵を貼り付けてある。李多に頼まれ、紀久子が自宅のパソコンで検索して見つけたし、プリンターでプリントアウトしてきたものだ。絵と実物の花を見比べると、そっくりなのがよくわかる。

少年の視線は、ゴッホからモネ、ゴーギャン、マティス、そしてまたゴッホに戻った。怒っているようにさえ見えるほど真剣な表情だ。しかし花のむこうにだれかがいるかどうかまでは、さすがにわからない。

店の中から光代さんが自分を見ているのに気づいた。李多と並んで、作業台で花束をつくる彼女は、顎で少年を指す。早く話しかけると催促しているのだ。

わかりましたよ。やればいいんですよ、やれば。

紀久子は覚悟を決めた。しかしいざとなると、相手が子どもでも緊張する。息を整えてから「あの」と声をかけた。

「はい？」ふりむきざまに射貫くような鋭い目をむけられ、紀久子は少なからずビビってしまう。

「ここにいたら邪魔ですか」

声変わりの途中だからか、少年の声は少し掠れていた。

「とんでもない。そんなことありませんよ」ビビった自分を隠すため、紀久子は軽く咳払いをした。「買う花を決めかねているのであれば、いっしょに選んでさしあげようかと」

少年からは返事がない。真一文字に口を閉じているばかりか、眉間に皺を寄せて気難しい顔になる。

「あ、でもいいんですよ。ひとりでじっくり考えてくださっても、いっこうにかまいません。なにかあれば、おっしゃってくださいね」

「友達が引越すんです」その言葉を絞りだすように少年は言った。

「いつ？」すかさず紀久子は聞き返す。

「今度の土曜です。それであの、そいつに花をあげなくちゃならなくて」

「友達って学校の？」

「そうです」

「あげなくちゃいけないってどういうこと？」

「お別れになにかくれと言われて、なにかじゃわからないからなにがいいか言えって言ったら、花がいいって」

「どんな花？」

「って俺も訊きました。そしたら幼なじみなのにわからないのかって言われてしまっ」

そこで紀久子ははたと気づいた。少年が花のむこうに見ていたのは、その幼なじみにちがいない。そしてさらに質問を重ねた。

「思い当たる花はあるんですか」

「それがまったく。いくら考えても思いだせなくて」

少年はAを落とす。眉間の皺は消え、目の鋭さも失われ、すっかり途方に――その表情を見て、紀久子は少しでも力

になつてあげたいという心持ちになった。

「なにか手がかりはないんですか。たとえば昔、その友達にあげた花か、あるいはもらった花はありません？」

「どうだろ」少年はBを捻った。「そもそも花をあげたりもらったりした覚えはとくに。あ、でも」

「なんです？」

「小学校るとき、あいつのピアノ発表会にいったんです。そんなとき花束を渡したような。でもなんの花だったかはさっぱり」

「何年生のとき？」

「けっこう昔です。四年か五年」

「あなたはいま中学生？」

「中二です」

ならばほんの三、四年前だ。しかしこの歳の子にすれば〈けっこう昔〉にちがいない。

「当時の写真とかビデオは残っていない？」

「たぶん親が持っているかと」

「ピアノの発表会に限らず、あなたと友達がいっしょのところを撮ったものの中に、写っている可能性があるんじゃない？　そういうのを見ているうちに思ひだすこともあるかもしれないし」

「やってみます。ありがとうございます」

Cを返して走り去る少年を見送ってから、紀久子は店内に入る。李多はガーベラとバラがメインの束売りはすでにつくりおえ、いまは光代さんとともに、丸い箱の器のボックスに取りかかっていた。箱は紙製なので、水が染みでないようにセロハンを敷いてから、吸水性のスポンジを置いて花を活けていく。花はユリとトルコギキョウがメインだ。ユリは八重咲きで花びらが赤紫と白のサマンサという品種で、トルコギキョウは花びらが白のを用いていた。これも二千円の商品だ。

「ナイスアドバイス」ボックスに花を詰めながら李多が言った。

「だけど花は売れませんでした」

「幼なじみが好きな花がわかれば、買にくるかもしれないわ」

「どうですかね。自分で言っというてなんですけど、いまのでわかるとは正直思えません」

「それでもキクちゃんが力になろうとしたことは、彼には伝わったはずよ。ウチみたいな小さな店は、そういうのが大切だからさ。これからもなるべくお客さんには話しかけてみて」

「わかりました」

(中略)

「おはなのくるまだっ」「ほんとだ」「あれはバラのはなだよ」「ステキイ」「かわいいっ」

ラヴィアンローズで信号待ちをしていると、目の前の横断歩道を保育園の園児達が、列をなして渡っていく。手を振ってくるので、紀久子も手を振り返す。(中略)

「おはなのくるまさんバイバイ」「バイバイ」

子ども達が通り過ぎたところで信号が青になった。車を走らせてしばらくいくと、背後から「紀久子さあん」と呼ぶのが聞こえた。下の名前をさん付けで呼ぶひとなど、鯨沼では馬淵先生ただひとりである。しかしその声は馬淵先生よりもずっと若々しかった。

「紀久子さあん、待ってくださいあい」

ドアがないから当然ドアミラーもなく、うしろを確認する術がない。紀久子は車を路肩に停めて振りむくと、野球のユニフォームを身にまとった子が、猛ダッシュで走ってくるのが見えた。

「す、すみません」

追いついてから野球帽をとったその顔は、あきらかに女の子だった。しかも紀久子は彼女に見覚えがあった。

「あなた、馬淵先生のお孫さんじゃない？」

「はい。鯨沼中学二年三組で、キラキラケ丘サシヤインズの四番キャッチャー、馬淵千尋です」

えらく丁寧な自己紹介だ。

馬淵先生の自宅へ花材を配達にいった際、紀久子は千尋と何度か会っていた。馬淵先生に生け花を習い、教室の手伝いをしているのだが、細身で小柄な祖母とちがいの、大柄で肩幅が広く、がっちりした体格だった。はじめて見たときはジャージ姿だったので、高校生くらいの男子だと思ったほどである。

馬淵先生の母親の名前が平仮名でいち、先生が十に重ねるで十重、ひとり娘は百の花で百花、孫娘が千尋だと、先生本人から聞いている。ひとり娘の百花が十年ほど前に離婚し、子どもを連れて出戻ってきたこともだ。孫の千尋が、地元の少女野球チームに所属している話も聞いた覚えがあった。それだけおしゃべりというか、自分の話をするのが好きなのだ。

「じつはお訊きしたいことがあって」

1	「
2	「
3	「
4	「
5	「
6	「
7	「
8	「

聞き返されるのが意外だったらしい。戸惑いと焦りが入り混じった彼女の表情を見て、紀久子の心が動く。坊主頭の彼に抱いたのとおなじく、少しでも力になってあげたいと思った。

「よかったら詳しく話を聞かせてちょうだい」配達はすでにおえており、あとは店へ帰るだけだったのだ。「事と次第では協力してあげる。花屋としてできる範囲でよければだけどね」

紀久子の申し出は、さらに意外だったようだ。千尋は少しためらいながら、「お願いします」と言った。

「この先にある細道を左に入って少しいくと、小さいけど、雰囲氣のいい公園があります。そこで話を聞いてください」

「一年のときからバッテリーを組んでいたピッチャーの西^{にし}つて子が、今度の土曜に引越しちゃうんです」公園に着いて、木陰のベンチに横並びに腰かけるや否や、千尋は話しはじめた。西はおなじ中学で同学年だが、クラスはべつだという。「西と宇田川は道を挟んだむかい同士の家で、保育園の頃からずっといっしょの幼なじみでして」

「西さんって、野球以外にもピアノをやってる？」

「やってます」千尋がハツとした表情になる。「宇田川は西についてあなたに話したんですか」

「幼なじみが引越しをするから、花をあげなくちゃいけないって。でも名前はださなかったよ。どんな花がいいか訊ねたら、幼なじみのにわからないのかって言われたんでしょ」さらに紀久子は宇田川が三日連続で川原崎花店を訪れ、今朝は自分が応対したところ、そのときの会話の内容も手短かに話した。「彼がウチの店で花を買おうとしていたのを、どうしてあなたは知っているの？」

「クラスで仲いい友達数人とのグループLINEに一昨日、〈宇田川見つけ〉ってアイツが花屋の前にいる写真が送られてきたんです」千尋はスマホをだして写真を見せてくれたうえに、「宇田川は女子にけっこう人気なんですよ」と付け足すように言った。それが不満であるかのような口ぶりだった。

「西の話では、お別れに欲しいものはないかって宇田川に言われて、それぐらい自分で決めるよとカチンときて、黙ったままでいたらしいんです。宇田川は莫迦で空気が読めないんで、しつこく訊ねてきた。だから適当に花と答えると、どんな花がいいのだとさらに訊いてくるものだから、幼なじみのにわからないのかと言いつつ返してしまっただけで」

「なにそれ？」

「私も西から話を聞いたとき、そう言いました。いつもそうなんです、あのふたり。西ったらめちゃくちゃ成績がいいクセして、そういうところは宇田川とおなじくらい莫迦なんです。莫迦同士お似合いなんだから、最後までいいは素直になればいいのに」

恋愛と呼ぶにはあまりに拙い話に、紀久子は自分の頬が緩んでいくのに気づいた。でも千尋は真剣だ。宇田川も西も、彼女とおなじくらい真剣にちがいない。そう考えると笑うのは失礼だと、紀久子は表情を引き締めた。

「でも莫迦で素直じゃないけど単純なんで、宇田川からどんな花をもらっても、西はよろこぶはずなんです。そこがまた問題で」

「どうして？」

「宇田川はいつぱい悩みだすと、なかなか結論がだせずにヘマをしでかすんですよ。切羽詰まると尚更です。ボクシングの試合でも、ここぞというときに大振りのパンチをだして、相手のパンチをまともに食らって負けちゃうヤツなんです。それが本人にすれば会心の一撃のつもりってところが、じつに間抜けで。今回もやりかねません。たとえばお店でいちばん高い花はなんですか」

「胡蝶蘭かな」

「西が好きな花が思いだせず、そもそももないのだから思いだしようがないんですが、だったら花屋でいちばん高い花を渡せば文句あるまいと胡蝶蘭を買いかねません」

「そんな莫迦な」

「莫迦だからするんです。どんな花でもいいからって、別れ際に胡蝶蘭を手渡されたら引きますよね」

それはそうだ。

「ですからお願いです。そんな真似だけはさせないで、ごくふつうであたりまえの花を売ってもらえませんか」

「わかった」

花屋としてできる範囲ではある。千尋を安心させるために、紀久子にはっこり微笑んだ。

「この店にある花をぜんぶ一本ずつください」

三日後の土曜、西が引越しをするはずの日の午後一時過ぎ、勢い込んで川原崎花店に入ってくるなり、宇田川はそう言った。

「どういうこと？」

床に落ちた花びらや葉を箒で集めていた紀久子は、その手を止めた。光代さんは休みで、芳賀は三階でランチを食べている。売場にはあと李多しかおらず、彼女は作業台で、《花天使》経由で注文のブーケをつくっている最中だった。

「親に頼んで、昔の写真や動画を見て確認したんですけど、幼なじみに花を渡しているところなんかどこにもなくて、それであの、いろんな花を買えば、そのうちのどれかは当たっているかもしれないと思って」

胡蝶蘭ではなかったにせよ、千尋⁴の心配は的中したわけだ。

「ぜんぶ一本ずつにしたって、けっこうな値段になるわよ。それでもいいの？」

「かまいません。自分の全財産^{さいざん}持ってきました」

「いくら？」

「四万七千六百円です」

あの子に花を売ったら、その同額の特別手当をだしてあげてもいいわ。

三日前、李多にそう言われたのを紀久子は思いだす。いや、駄目^{だめ}だ。ここは千尋との約束どおり、なんとかして、D・を売るべきだろう。

でもどうやって？

「そんな花束をもらっても、相手はよろこぶとは思えないけどな。花もかわいそうよ」

ブーケをつくりながら李多が言った。注意はしているものの、その口調はのどかで優しくもあった。自分がないときに、宇田川がきたらと思う、スタッフ三人には、千尋から聞いた話は伝えてあった。

「な、なんですか」

⁵聞き返す宇田川は、動揺^{どうよう}を隠し切れずにいる。

「きみ、戸部ボクシングジムの練習生よね」

「そ、そうです」

「ボクシングだって、どれだけ乱打しても相手に効かなくちゃ意味がないでしょ。それよりも自分がこれだと決めた一撃を打つべきよね。つまりどの花がいいか、きみ自身が決めるべきじゃない？」

「だけどその花が西の欲しい花じゃなかったらどうするんです？」

幼なじみではなく西とはつきり名前を言った。だが宇田川本人は気づいてないらしい。

「相手が欲しいという気持ちよりも、きみがあげたいという気持ちのほうが勝^{まさ}ればいいの。そうすればもらう相手もよろこばすことができるわ」

宇田川は虚^{きょ}を衝^つかれた顔つきになる。そして店内を見回してから表にでて、店頭に並ぶ花の前に立つ。売行きが好調で、今日もヒマワリだらけだ。紀久子は彼のあとを追う。

「これをください」宇田川が指差したのは「マティスのひまわり」だった。「はじめて見たときから、彼女にぴったりの花だと思っていたんです」

「私もこのひまわり、好きです」紀久子はすぐさま同意した。「いいと思います」

八重咲きのヒマワリでたくさんの花弁が重なり、たてがみに見える。他のと比べると色が濃^こいうえに大輪で、荒々^{あらあら}しくも逞^{たくま}しい、それでいて美しくて眩^{まぶ}しいヒマワリだった。

「ありがとうございます」

「何本にします？」

「三本っ」作業台のむこうから李多が言った。「ヒマワリ⁶だったら三本がちょうどいいわ。三本になさいな」

はたして「マティスのひまわり」を西がよろこんでくれたのか、そもそも宇田川はきちんと渡すことができたのか、花屋としては知る由^{よし}もない。

だが数日後、花の配達でラヴィアンローズを走らせていたときだ。

「紀久子さああん」

交差点で信号待ちをしていると、千尋の呼ぶ声が聞こえてきた。斜向^{はす}かいの歩道で、おなじユニフォームを着た子達十人ほどいつしよに信号待ちをしていた。

「先日はありがとうございましたあ」

脱いだ帽子を振る千尋を見て、紀久子は寺山修司の短歌を思いだした。

〈列車にて遠く見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし〉

列車ではなく電気三輪自動車だし、少年ではなく少女だ。短歌の帽子は麦わら帽子で、野球帽ではあるまい。それにヒマワリが帽子を振る少年みたいに見えたというのと、まるで逆だった。

千尋が〈向日葵〉に見えた。

トルコギキョウやグラジオラスなどは、花の色で花言葉がちがうが、ヒマワリは本数でちがった。九百九十九本は何度生まれ変わってもきみを愛する、百八本は結婚しよう、九十九本は永遠の愛、十一本は最愛、七本はひそかな愛、一本だけだと一目惚れという具合にである。

そして三本は。

愛の告白だった。

(山本幸久『花屋さんが言うことには』より)

*1 花卉市場……観賞用の草花を売り買いする場所。

*2 グループLINE……特定のグループ内でメールや通話ができるサービス。

*3 ラヴィアンローズ……花を配達するための一人乗りの三輪自動車に付けた愛称。

*4 バッテリー……投手(ピッチャー)と捕手(キャッチャー)の組み合わせを示す野球用語。

問一 〽線部a() 〽知れている、〽線部b「途方に()」とありますが、()にそれぞれひらがな三字を入れて、

aは「たいしたことはない」、bは「どうしてよいか分からなくて困った」という慣用句になるよう答えなさい。

問二 本文中のA Cに当てはめるのに最も適切な言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 額 イ 顎 ウ 頬 エ 首 オ 肩 カ 腕 キ 膝 ク 踵 ケ 足

問三 〽線部1「紀久子の言葉を李多はあっさり否定する」とありますが、なぜ李多は否定したのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 熱心に花を見ながら、大切な記憶を思い出そうと必死になっていると思ったから。
イ たった三日間、花屋に來ただけでは、花が好きかどうか分からないと考えたから。
ウ 花のむこうに立っていた知人を、花の隙間からこっそり見ていたのに気づいたから。
エ 花が好きなら買うはずなのに、いつも見るだけで帰って行く姿が印象的だったから。
オ 花を贈る相手を思い浮かべながら、いろいろな花を見つめているように感じたから。

問四 〽線部2「昨日は私で、昨日は光代さんだったんだから、今日はキクちゃんだね」とありますが、これは何をすることを指していますか。十字以上十五字以内で答えなさい。

問五 次のア～クは、本文中の「1」「8」に入る会話の内容です。正しい順序に並び替^かえ、記号で答えなさい。

- ア 戸部ボクシングジムに通っている？
イ な、なんでって言われましたも
ウ なにかしら
エ 宇田川くんかどうかはわからないけど、ウチの店にきた坊主頭の男の子が、戸部ボクシングジムのTシャツを着ていたわ
オ なんでそれを知りたいの？
カ そうです。でもどうしてそれを？
キ ウチのクラスに宇田川という男子がいて、坊主頭というくらいしか特徴がないのですが
ク 間違いない宇田川です。ジムでも学校でも坊主頭は俺だけだって言っていましたんで。アイツ、いや、彼はあなたの店でなんの花を買おうとしていましたか

問六 — 線部3「それが不満であるかのような口ぶりだった」とありますが、なぜ不満なのですか。適切なものを次から二つ選^えび、五十音順に記号で答えなさい。

- ア 自分の方が大柄で肩幅が広く、がっちりした体格なのに、背が低く細身の宇田川の方が女子に人気があるのが納得がいかず面白くないから。
イ 花屋にいる宇田川を勝手に写真に撮ってグループLINEに流すことが、他人の私生活をのぞき見しているようで良くないと思ったから。
ウ 女子にけっこう人気がある宇田川は、異性として気になる存在だったので、ライバルが多いことに気がつき焦^{あせ}ってしまったから。
エ 西の友達として、西と宇田川がうまくいくことを願っているのに、宇田川が女子に人気があると、他の女子に水を差されるかもしれないから。
オ お別れにほしいものはないかと西に訊ねた宇田川に対し、女子にけっこう人気があるのに女心が分からないことが、腹立たしくなったから。

問七 ―線部4「千尋の心配」とありますが、どういふことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 西の欲しいものが分からないからといって、宇田川がやたらにお金をかけてプレゼントを買ってしまうのではないかということ。

イ 西の好きな花を思い出せず、おわびの気持ちで花屋にある花を宇田川が全部買い占めてしまうのではないかということ。

ウ 大事なのは西を思う宇田川の気持ちなのに、西の言葉に振り回されて、昔の写真や動画を確認する手間をかけてしまうこと。

エ いろいろな花を買えば西がほしい花もその中にあるだろうと考えて、花を大量に買った挙げ句、ほとんど処分してしまうこと。

オ 昔の写真や動画を確認しても、幼なじみに花を渡しているところなんかどこにもないと宇田川が気づくかもしれないということ。

問八 本文中の D に当てはめるのに最も適切な言葉を、本文中から十三字でぬき出して答えなさい。

問九 ―線部5「聞き返す宇田川は、動揺を隠し切れずにいる」とありますが、なぜ動揺しているのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 四万七千六百円という大金をはたいて花を買おうと決心したのに、当てずっぽうで花を買っても花のほとんどは西の好みではないだろうから花が無駄になると、冷静に指摘されたから。

イ 花屋にある花を全種類買いそろえれば西が欲しい花も混じっていると思い、我ながらいいアイデアだと思っていたのに、そんな花束では相手はよろこばないだろうと言われたから。

ウ 西が欲しい花を買うことしか頭になくて、花がかわいそうかどうかまでは考えもしなかったので、花屋さんに「花がかわいそう」と言われて初めて自分勝手だったことに気づいたから。

エ 全財産を使い果たすような高価な花束を西に贈ったら、中学生にはぜいたくすぎるプレゼントになってしまい、よろこびよりもむしろ迷惑になるかもしれないと初めて想像できたから。

オ 西が欲しい花をあげたいと一生懸命考え、自分の全財産をかけてもいいとまで思いつめたのに、その最高の花束をプロの花屋さんに「そんな花束」と言われてしまい低評価だったから。

問十 ―線部6「ヒマワリだったら三本がちょうどいいわ。三本になさいな」とありますが、李多がそのように薦めた意図を明らかにしながら、ここでの李多の考えを五十字以上七十字以内で答えなさい。



東大特待Ⅰ（1月12日）

ここにシールをはってください

受験番号

整理番号

氏名

解答用紙

(50分)

[illegible]